



8月5日の平和聖日の礼拝は避暑地で迎えることになりました。妹から一度行くようにと勧められた軽井沢追分教会(稲垣壬午牧師)に行くことにしました。時間があつたので、教会の近くの用水地まで散歩してみました。周辺は別荘地で、区画整理された広い敷地が続き、木々の奥に建物が静かに、ひっそり佇んでいました。

追分には堀辰雄文学記念館があり、そのすぐ近くに母校の大学の寮があつて、学生時代にはクラスメイトと行ったことがありました。現在は寮は取り壊されていると聞いていますが、懐かしい場所です。堀辰雄の「風立ちぬ」を読んだ時、軽井沢のひんやりした空気と風のそよぐ様を肌で感じるような気持ちになったことを覚えています。



さて、教会のホームページで調べると、この日は「夏の礼拝コンサート②」と題され、午後2時半開始でした。この日の演奏者は今井奈緒子氏となつていたので、喜んでしまいました。彼女の演奏を横浜市民ホールで聴いたことがあったからです。駐車場に車を留めたいので、友人が牧師館の玄関に行くと、「御用の方は大きな声で呼んでください」と貼り紙がありました。一度声をかけましたが、返事がなく、それこそ大声で叫んだそうです。すると T シャツ姿の男性が現れ、びっくりしてしまつたようです。その方が稲垣牧師で、気さくな方でした。緑の木々に囲まれた広い境内に木造の礼拝堂がありました。

軽井沢追分教会は毎週日曜日午後2時半から礼拝です。100人くらい収容できる美しい落ち着いた感じの礼拝堂です。講壇正面にパイプオルガンが設置されていたのには驚きました。稲垣牧師がネクタイを締めてこられ、友人は怒鳴り声を出して呼んだことをしきりに恐縮していました。

オルガニストと、オルガニストのアシスタントが講壇に入り



牧師と聖書朗読者が会衆席に着きました。この日は「平和聖日」としてすべての教会が平和の主キリストを賛美し、平和を祈り求める礼拝を捧げます。稲垣牧師は「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。(マルコ0:13)を読まれ、弱く無価値に見える子供たちが大切にされるのが「平和のバロメーター」であると説教されました。礼拝では前奏、黙想、栄光頌、奉獻、後奏とオルガニストの演奏が重要な働きを担い、祈りへと誘いました。素晴らしい演奏でした。興味深く、初めて聞いたのは聖トマス教会のバッハの前任者 J.Kuhnau(1660-1722)の『聖書物語』より第一ソナタ「ダビデとゴリアトの闘い」でした。聖書を短く語った後、ドラマチックな音楽が情景を描き出します。力の誇示、恐怖、祈り、信仰、闘い、打倒、退却、勝利の歓喜などが演奏され、オペレッタのようでした。少年ダビデの信仰を称えるソナタです。現在のイスラエル、パレスチナ状況がダビデ物語とは逆転していて、何か胸苦しさを感じました。イスラエルの傲慢な武力行使は許せず、パレスチナの貧しさはいつも心の苦しみになっています。

礼拝には古い友人達と高校時代の恩師も出席されていて、思いがけない再会に喜びました。教会では必ずこういう出会いがあります。礼拝後、教会の広い庭でお茶と手作りのケーキやクッキーをいただきました。恩師はなんと84歳、30分山道を下って礼拝に歩いてこられた由。先生を見習いたいと思いました。

